「Penetrate」

登場人物表

暁　隼歌（１４）女。音楽が大好き。若葉と蒼空の娘。

大空　鵜（２８）男。ハヤブサ大学の准教授。

暁　若葉（４０）女。音楽が大嫌い。隼歌の母親。未亡人。

暁　蒼空（２６）男。隼歌の父親。覆面歌手Ｐｅｎｅｔｒａｔｅとして活動していた。故人。

隼歌のクラスメイトたち

モブたち

○シーン１　隼歌の部屋

隼歌（１４）、床に座り込んでいる
隼歌の正面にオルゴール
隼歌、少しリズムにのって揺れている
小さな声で鼻歌を歌う
ピタリと止まる隼歌
隼歌、拳をギュッと握る
隼歌「いつか、私も…」
隼歌、リズムに揺れながら鼻歌を歌う
Ｔ「Ｐｅｎｅｔｒａｔｅ」

○シーン２　隼歌の家　リビング　朝

ラジオ「本日、歌曲についての発言で物議を
醸していた鹿島議員が、先程責任
をとって辞職することが公となり
ました」
若葉（４０）、フライパンで卵を焼いて
いる

隼歌、制服でリビングに入ってくる
隼歌「おはよう」
隼歌、窓の外をちらりと見る
窓の外は吹雪
若葉「おはよう。お皿取ってくれる？」
隼歌「うん」
フライパンの音が響き渡る
隼歌、お皿を棚から取り出す
隼歌、お皿を片手にラジオをじっと聞く
隼歌「この人ってさ」
若葉、拳で台をバァンと叩く
若葉「隼歌？」
隼歌、俯いてお皿を若葉に渡す
隼歌「ごめん」
若葉、そのお皿に目玉焼きなどを盛る
隼歌、それを受け取って机に置く
ラジオ「まあ、この厳しい時代に娯楽は不謹慎ですからねぇ」
隼歌、席に着く

若葉、席に着く

若葉、隼歌「いただきます」

二人、黙々と食べる

ラジオ「ほら、いたじゃないですか。確かPenetrateってい」

若葉、ラジオをぶつ切りする

隼歌、それを横目で見る隼

少しの沈黙

若葉「あなたの父は犯罪者」

隼歌、目を丸くして動きを止める

若葉「それでいいの。それ以上もそれ以下もないのよ」

隼歌、もう一度食べ始める

隼歌「…わかってるよ」

隼歌、食べ終わる

隼歌「ごちそうさま」

隼歌、出る支度をしに部屋を出る

若葉、溜息をつく

若葉、少し食べる

隼歌、かけてあるコートとマフラーを

とる

隼歌、ドアの陰から顔を出す

隼歌「行ってきます」

若葉「うまくやるのよ」

隼歌「…わかってるよ」

隼歌、コートを着る

隼歌、マフラーを右手にドアを閉める

○シーン3　住宅街　放課後

木に霜が降りている

雪が積もっている道

隼歌、友達と別れる

隼歌、歩いている

口からは白い息が漏れ出ている

隼歌M「私は音楽が好きだ。でも、この世界では嫌われている」

隼歌M「今日の朝のニュースだってそうだ」

朝のラジオを思い出す

隼歌M「歌や曲を肯定するような発言が問題

視された議員が辞職した」
隼歌M「この時代にそんなもの不謹慎なんだってさ」
隼歌、上を向き大きくため息
隼歌M「このままじゃ本当のことなんて口が裂けても言えない」
隼歌、立ち止まる
隼歌、ハヤブサ大学附属図書館（以下図書館）を見上げる
隼歌、視線を戻す
隼歌M「私は昔から、家でこっそり見つけたオルゴールを聞くのが大好きだった」
隼歌、図書館に入っていく
隼歌M「何度も何度も繰り返し聞いた」
隼歌M「そして、自分の曲を作曲したいと思うまでに」

○シーン４　図書館　玄関ホール　放課後

隼歌M「そう時間はかからなかった」
隼歌、マフラーをとる
隼歌、図書館内を歩く
隼歌M「昔からこっそりと書き溜めた作曲ノートは」
隼歌、階段の手すりに手をかける
隼歌M「10冊以上にのぼる」
隼歌、階段をのぼる
隼歌M「もし、これが母や友達にばれたら？」
隼歌、ピタリと動きを止める
隼歌M「想像したくもない。後ろ指を刺され、気持ち悪いなんて言われるかもしれない」
隼歌、階段をもう一度登り始める
隼歌M「でも、大好きだからやめたくなかった。溢れ出る音符や旋律を止められなかった」
隼歌、階段を登りきる
隼歌M「自分が何をしているかは分かって

る」

隼歌、空いている椅子を見つけて座る

隼歌M「でも、自分で作った曲を聞いてみたくて、」

隼歌、バッグからノートを出す

隼歌M「衝動を止められなかった。諦めきれなかった」

隼歌、ノートを開きペンで書き始める

隼歌M「お母さん、なんて言うかなぁ」

隼歌、日が落ちてもう少しするまで曲を描き続ける（タイムラプス）

そのままフェードアウト

○シーン5　同　2階　夜

隼歌以外誰もいない薄暗い図書館

隼歌、ノートに描き続けている

鷹也（22）、巡視している

鷹也、隼歌を見つける

鷹也「こんな時間まで…」
鷹也、隼歌に近づく
鷹也「もうすぐ閉館時間ですｙ」
鷹也、隼歌のノートが見える
鷹也、目を丸くして驚く
鷹也、机を隼歌のノートごとバァンと叩く
隼歌、ビクッとして鷹也を見
鷹也「何をしてるんだ！」
隼歌、押し黙る
鷹也「君は、今自分がやっている事の意味を分かっているのか」
×　×　×
（フラッシュ）
ラジオ「まあ、この厳しい時代に娯楽は不謹慎ですからねぇ」
若葉「あなたの父は犯罪者」
×　×　×
隼歌、自分のノートを見る
×　×　×

（インサート）
大量の作曲ノート
オルゴール
×　×　×
隼歌「…がってる」
鷹也「は？」
隼歌、涙目で景色がかすむ
隼歌「間違ってる。歌は、もっと、そんな、悪いものじゃなくて、元気づけてくれるものなのに…」
鷹也、ため息をつく
鷹也「学生ごときが理想論を語るんじゃない。綺麗事は世間をもっと見てから言いなさい」
隼歌、鷹也を思いっきり睨む
隼歌「…帰ります」
隼歌、急いでノートと荷物を持って逃げ出す
鷹也「こら！待ちなさい！」
隼歌、走って逃げる

鷹也、それを追いかける
鷹也、しばらくして隼歌を捕まえる
二人、肩で息をする
鷹也「ったくちょこまかと…」
鷹也、隼歌のリュックを掴む
隼歌、黙って息を荒げている
鷹也「身分を把握させてもらうよ。学校にも一報入れます」
隼歌、ビクッとする
隼歌「えっ」
鷹也「当たり前だろう。ほら、早く学生証を出しなさい」
隼歌「そっそれは…」
隼歌、逃げようとする
鷹也「こら」
鷹也、隼歌の腕をぐいと引っ張る
隼歌M「お母さんに、他の人に、全部バレる？」
隼歌、涙目になる
鷹也「早く！」

鶇（２８）、二人の後ろから登場
鶇、鷹也の肩をぽんと叩く
鶇「こらこら、駄目だよ。やりすぎ」
鷹也「鶇准教授。なんの御用で？それともよっぽどの暇人でいらっしゃる？」
鶇「ちょっと頼んでおいた調べ物を見に来たんだ」
鶇、隼歌を覗き込む
鶇「おお。調べ物は順調かい？」
隼歌、少し間をおいてゆっくりと頷く
鶇「ありがとう」
鶇、にやけながら鷹也を見る
鶇「と、いうわけなんだよ。警備員くん。離してやってくれるかい？」
鷹也、深くため息をつく
鷹也「今回はあんたの顔に免じて渋々、超渋々」
鶇「分かったから」
鷹也「許すこととします」
鷹也、隼歌を見る

鷹也「今回だけですからね」
隼歌、こくりと頷く
鷹也、隼歌の腕を離す
鶇「もう夜も遅いし、送っていこう」
鶇「お疲れ様。警備員くん」
鷹也「はいお疲れ様です一生顔出さんで下さい」
鶇「僕ここの大学の准教授だからそれは難しいかな」
隼歌、鷹也に礼をする
鷹也、ため息をつく
鷹也「ったく。めんどくさいったらありゃしない」
鷹也、二人が見えなくなるまで見送る

○シーン6　住宅街　夜9時

隼歌と鶇、歩いている
隼歌、鶇の少し後ろをうつむいて歩く
そこかしこの屋根に雪が積もっている

道の端に小さな雪だるま
鶫、チラリと雪だるまを見る
隼歌、雪だるまに気づかない
隼歌、立ち止まる
鶫、少しして隼歌の足音が聞こえない
ことに気付く
鶫、振り返る
鶫「どうしたんだい」
隼歌、深々と頭を下げる
隼歌「助けていただいてありがとうございま
した」
鶫、微笑む
鶫「いいんだよ。そんなこと」
隼歌、顔をあげる
鶫「それよりさ、君、珍しいよね」
隼歌「はい？」
鶫「音楽に対してはある程度知識が統制され
ているから」
隼歌、生唾を飲む
鶫「音楽なんて聞いたことがない人が大半の

はずなんだ」
隼歌、少し後ずさりする
隼歌、落ちていた枝を踏みつけて折る
鶫「君はそれを作れることも作り方も知っている」
鶫「一体なぜなんだい？」
隼歌「いや、それは……」
隼歌、目が泳ぐ
鶫、その様子を少し傍観する
鶫、鼻歌で少し歌う
鶫「♪～」
隼歌、ぱぁっと顔が輝く
隼歌「それって私の！」
隼歌、ハッとして手で口をおさえる
手の隙間から白い息が漏れ出る
鶫、ハハッと笑う
鶫「理由なんていいか。本当に君は歌が大好きなんだね」
隼歌、手を口から外す
ゆっくりと涙が溢れ出る隼歌

雪に涙が落ちて瞬時に凍る

隼歌「…はい。大好きです」

ゆっくりと隼歌に近づく鶇

鶇「そうか。それはいいことだ」

鶇、しゃがんでハンカチを渡す

鶇「使いな？ハンカチ」

隼歌「ありがとうございます」

ハンカチを受け取り涙を拭う隼歌

隼歌M「初めて、自分の愛するものが肯定された

瞬間だった」

隼歌M「この日のことは未だに鮮明に覚えている」

○シーン7　隼歌の部屋　翌朝

隼歌、作曲ノートをペラペラと見返す

部屋がノックされる

ビクッとしてノートを抱える隼歌

若葉「朝ごはんよ。起きてる？遅いわよ」

隼歌「お、起きてるよ。ごめん。すぐ向かうね」

若葉「分かった」

隼歌、若葉の足音が聞こえなくなるまでじっと待つ

隼歌、作曲ノートを机におき小走りで部屋を出る

○シーン８　隼歌の家　リビング　朝

隼歌と若葉、朝ごはんを食べている

若葉「昨晩、遅かったわね」

隼歌「…ごめん」

若葉、コップを机に勢い良く置く

隼歌、大きな音にビクつく

若葉「どこに行ってたの？」

隼歌「わ、わからないことがあって図書館で調べ物してたの」

若葉「そう。今日はできるだけ早く帰ってきなさいね」
隼歌「気を付けます」
隼歌、手を合わせる
隼歌「ごちそうさまでした」
隼歌、食器を下げる
若葉「隼歌」
隼歌、動きをとめて若葉を見る
隼歌「うん？」
若葉「作曲って知ってる？」
隼歌「（早口で）曲なんて作ったことないけど、どうして？」
若葉、ため息をつく
若葉「いや、気になっただけよ」

○シーン９　同　リビング　昨晩

若葉「おかえり」
隼歌「ただいま」
２人、すれ違う

隼歌、鼻歌を歌っている
若葉、振り返る

○シーン10　（戻って）　同　リビング
朝

若葉、うつむく
若葉M「これは……」
隼歌、小走りでリビングを出ていく

○シーン11　同　玄関　朝

隼歌、コートとマフラーを着ける
隼歌、リビングの方を振り返る
隼歌「行ってきます」
若葉「行ってらっしゃい」
家を出る隼歌

○シーン12　同　リビング　朝
若葉、立ち上がる

若葉、リビングを出ていく

○シーン13　住宅街　放課後

隼歌、歩いている

雪が積もった赤の信号機

隼歌、立ち止まる

隼歌、バッグからハンカチを取り出す

隼歌「あの人、図書館にいるかな」

青になる信号機

隼歌、横断歩道をわたる

隼歌、図書館前で立ち止まる

隼歌、ハンカチを見る

隼歌、深呼吸

隼歌、冷気でむせる

隼歌、涙目

隼歌「……ばか」

隼歌、図書館に入る

○シーン14　図書館　玄関ホール　放課後

鷹也、階段付近に立っている
鷹也、自動ドアの音に反応する
鷹也、玄関を見る
入ってきた隼歌、鷹也と目が合う
隼歌「あ」
隼歌、凍り付く
鷹也、笑顔で会釈
鷹也「どうもぉ」
鷹也、隼歌と足早で距離を詰める
少し後ずさりする隼歌
反応して開く自動ドア
隼歌、その音に驚いて振り返る
隼歌、向き直る
鷹也、隼歌に顔を近づける
鷹也、笑顔が消える
鷹也「（小声で）昨日の今日で何しに来たんだ」
隼歌、ハンカチを取り出す
隼歌「これ、借りてて、返したくて……」

鷹也、それをじっと見る

鷹也「あの人の？」

隼歌「はい」

鷹也「ふうん」

鷹也、ゆっくりと周りを見回す

鷹也、ため息をつく

鷹也「ついてきて」

鷹也、颯爽と歩き出す

隼歌、呆然と立ち尽くす

隼歌「え？」

手招きする鷹也

鷹也「ほら早く」

隼歌「え、あ、はい」

隼歌、ちょこちょことついていく

○シーン15　図書館　2階廊下　放課後

隼歌と鷹也、無言で歩く

鷹也「君はさ」

隼歌「はい」

鷹也「怖くないのか？」
隼歌「それは……」
鷹也「わかるだろ」
隼歌、少し考える
隼歌「怖いですよ」
鷹也、隼歌を見る
隼歌「最初っから、ずっと」
鷹也、前に向き直る
鷹也「なのにやめないんだな」
隼歌、微笑む
隼歌「大好きなので」
鷹也「……そうか」

○シーン16　ハヤブサ大学　研究室前　放課後

部屋の前で立ち止まる鷹也
鷹也「ついたぞ」
鷹也「ここがあん人の部屋だ」
隼歌「ここが……」

部屋をじっと見つめる
鷹也「じゃあ」
鷹也、足早に立ち去る
隼歌、会釈する
隼歌「ありがとうございました」
鷹也、振り向かず右手をあげる
隼歌、小さく深呼吸する
隼歌「よし」
隼歌、部屋をノックする
鶫「はあい」
鶫、ドアを開ける
鶫「おお。この前の。どうしてここが分かったんだい？」
隼歌「鷹也さんに…」
鶫、微笑む
鶫「へぇ？あいつが？そうか」
鶫「それで、何か用かい？」
隼歌、ハンカチを取り出す
隼歌「前のこれ、返そうと思って」
鶫、微笑む

鶫「あぁ…これか」
鶫、隼歌を見る
鶫「わざわざごめんね。でも、」
隼歌「でも…？」
鶫「いいんだ。気持ちだけ受け取るよ。それに」
鶫、ハンカチを見る
鶫「君が持っていた方がいいような気がするんだ」
隼歌「じゃあ、ありがとうございます」
隼歌、ゆっくりとハンカチをしまう
鶫「ごめんね。わざわざ足を運んでもらったのに」
隼歌「いえ……」
少し沈黙
鶫「あ、そうだ」
鶫、自分の研究室に引っ込む
鶫、楽譜を一枚持ってくる
鶫「これ…」
隼歌「あ、がくふ…？」

鶫「うん。本当に君はよく知ってるね」
鶫、楽譜を見る
鶫「君のも見せてもらえる？」
隼歌、恐る恐る頷く
隼歌、手が震える
隼歌、ノートを取り出し渡す
鶫「ありがとう」
鶫、それぞれ見比べる
鶫「こっちね、ある音楽家…あー世間一般には犯罪者なんだけども。その人が書いた曲なんだけどもね」
隼歌、鶫を見る
鶫「似てるんだ。君がかいた曲に」
隼歌、目を丸くして驚く
鶫「正直に答えてくれ。君は」
鶫の口が動く
鶫「歌手、Ｐｅｎｅｔｒａｔｅと何らかの繋がりがあるね？」
隼歌、押し黙る
鶫「何も糾弾したいわけじゃない。知りたい

んだ」

鶫「あの人の手がかりを」

隼歌「お答え出来ることは何もありません」

隼歌、冷や汗をかく

隼歌「帰ります。ハンカチありがとうございます」

隼歌、逃げるようにしてその場を去る

鶫「あっちょっと」

隼歌、無視してその場を去る

鶫、頭を抱え込む

鶫「あー。駄目だったかぁ…悪いことしたかなぁ…」

鶫、もう一度楽譜を見比べる

鶫「本当に似てるんだよなぁ」

鶫、隼歌の行った方向を見つめる

鶫「何者なんだ。彼女は」

○シーン17　隼歌の家　玄関　放課後

隼歌「ただいま」

静まり返っている家
隼歌、キョロキョロする
隼歌「……お母さん？」
隼歌、そろそろと部屋まで歩く

○シーン18　同　隼歌の部屋　放課後

隼歌、部屋のドアをあける
隼歌、部屋の電気をつける
隼歌「えっ」
ズタズタになって散乱しているノート
隼歌、よろよろとノートに近づく
隼歌、ガクリと膝をつく
隼歌「なっなんでこんなこと……」
隼歌、ゆっくりと破片を拾い集める
隼歌、少し呼吸が荒くなる
隼歌、涙目
隼歌「なんで……」
若葉、部屋の入り口に立っている
若葉「おかえり」

隼歌、振り返る
隼歌「お母さん」
隼歌、破られたノートを見る
若葉「あなた、嘘ついたわね」
隼歌「え？」
若葉「あなた、嘘ついたわね？」
若葉、ノートの破片を拾い上げる
若葉「こんなことしておいて？」
×　×　×
（フラッシュ）
隼歌、作曲ノートを机におき小走りで
部屋を出る
×　×　×
隼歌「あ…」
若葉「よくも作曲をしてないだなんて」
隼歌「ご、ごめんなさ」
若葉、部屋のドアをバァンと叩く
若葉「反吐が出るわ」
若葉、隼歌を見る
若葉「よくも私を裏切ったわね！」

若葉、隼歌に近づく
若葉「あなた、自分の立場が何か分かってるの？」
若葉、隼歌の胸倉を掴む
若葉「歌手の…犯罪者の娘なのよ！やりたいこと
なんてやっちゃいけないの！」
若葉、手を離す
若葉「ましてや作曲なんて…」
隼歌、泣きながら謝る
隼歌「ごめんなさい。ごめんなさい」
若葉、隼歌を抱きしめる
若葉「あなたまで、居なくならないで」
隼歌、息を荒げる
隼歌「う、うん。ごめん」
若葉、ふと視線を落とす
隼歌のバッグからハンカチが見えている
若葉、思わず飛びのく
隼歌、キョトンとする

若葉「あなた…そのハンカチどこで」
隼歌「も、もらったの」
若葉「誰に！」
隼歌「ハヤブサ大学の准教授」
若葉、頭を抱える
若葉「そう…」
若葉、立ち上がる
若葉「本当にどうしようもないわね」
隼歌「え」
若葉、部屋の出口へ歩く
若葉「さすが、犯罪者の娘だわ」
隼歌、傍観している
若葉、部屋の扉を勢い良く閉めて出ていく
隼歌「ごみ、片付けなきゃ…」
隼歌、ゆっくりと破られたノートを拾い集める
隼歌、静かに涙を流す
破片が涙で濡れる

×　×　×

（フラッシュ）
若葉「よくも私を裏切ったわね！」
若葉「あなた、自分の立場が何か分かってるの？」
若葉「歌手の…犯罪者の娘なのよ！やりたいこと
なんてやっちゃいけないの！」
若葉「ましてや作曲なんて…」
若葉「本当にどうしようもないわね」
若葉「さすが、犯罪者の娘だわ」
×　×　×
隼歌「犯罪者の娘、かぁ」
隼歌、集めた破片をゴミ箱に捨てる
隼歌、そのノートをじっと見る
隼歌「きっついなぁ…」
隼歌、ベッドに倒れこむ
隼歌、大きくため息をつく

○シーン18　ハヤブサ大学　研究室　夜

鶫、机を前に椅子に座っている
鶫、楽譜を見ている
鶫「今日は悪いことしたなぁ」
鶫、楽譜を机に置く
鶫「結局楽譜もらったまんまだし」
鶫、立ち上がる
鶫「明日来たら返そうかな」
鶫「……来るかな」
鷹也、ドアをノックする
鷹也「そろそろ閉館時間ですよ」
鶫「はいはいもう出ますよ」
鶫、楽譜を鞄に入れる
鶫、上着を持って部屋の出口へ歩く
鷹也、勢い良くドアを開ける
鶫、ドアに顔面を思い切りぶつける
鶫、手で顔を覆う
鶫「いっったぁ」
鷹也「すみません。出てくるのが遅くて帰っちゃったのかと思って」
鶫「ちゃんと返事したじゃん……」

鷹也「まぁ準備が遅いあなたが悪いんじゃないかと」
鶫「僕に対して風当たり強くない？」
鷹也、鶫の鞄に目を落とす
楽譜が鞄から見えている
鷹也「それ……」
鶫、涙目で鷹也を見る
鶫「ああ、あの子のだよ」
鷹也「随分あの子に肩入れしてますね」
鶫、顔をさする
鶫「似てるんだ。昔の僕に」
鷹也「ふうん」
鶫「自分から聞いておいて興味なさそうなお返事」
鷹也「というかここで油売ってていいんですか？
マジで図書館閉まりますよ」
鶫「油売らせたのも君だし図書館閉めるのも君じゃん？」
鷹也「まあそうですけど。早く帰りたくない

ですか？」

鶫「それは同意。帰ろう」

鶫、部屋を出る

鷹也「あと10秒で閉めるので頑張って下さい」

鶫「アラサーのおじさんに無理させすぎじゃない？」

鶫、手を振る

鶫「じゃあね」

鷹也「おやじ狩りには会わんで下さいね～」

鶫「滅相もない事を言うんじゃないよ全く」

鷹也、鶫を見送る

鷹也「帰ろ」

○シーン19　隼歌の家　リビング　朝

隼歌と若葉、朝ごはんを無言で食べる

隼歌「おかあさ」

若葉、思い切りコップをテーブルに叩きつけて置く

隼歌「ごめん」
隼歌、食べ終わる
隼歌、手を合わせる
隼歌「ごちそうさまでした」
隼歌、準備をしに部屋に引っ込む
若葉、ため息をつく
若葉、ご飯を食べ始める
隼歌、部屋から出てくる
隼歌「…行ってきます」
隼歌、鶫からもらったハンカチを握りしめる
隼歌、コートとマフラーをとり家を出る

○シーン２０　図書館前　朝

隼歌、トボトボと歩いている
隼歌、図書館を見上げる
鶫、その様子を遠くから見つける
隼歌、ため息をつきその場を去る

鶫、それを見て慌てて追いかける
鶫、隼歌に追いつく
鶫「待って！」
隼歌、ビクッとして振り向く
鶫、肩で息をしている
鶫「驚かせてごめんね」
鶫、楽譜を取り出す
鶫「忘れ物だよ。君の大事なものだろ」
隼歌、向き直る
隼歌「捨てておいてください」
鶫「……大丈夫？何かあったのかい」
隼歌「なんでもありません」
少し沈黙
鶫「でも」
隼歌「（叫ぶ）なんでもないって言ってるじゃないですか！！」
木から雪が大量に落ちる
木にいた鳥が一斉に飛び立つ
鶫、驚いてその方を見る
多くの通行人、隼歌を見る

鶫、隼歌へ視線を戻す
隼歌、ゆっくりしゃがみこむ
鶫、隼歌の方へ歩く
鶫M「君はまだ子供なんだからさ」
隼歌、涙を流す
鶫M「もっと自分の好きなこと好きなようにやって」
×　×　×
（フラッシュ）
幼少期の鶫、膝を抱えて涙目
幼少期の鶫、うつむく
×　×　×
鶫、下唇をかむ
鶫M「無邪気に笑っててほしいなぁ」
鶫、隼歌のそばにたつ
隼歌「准教授、私、……の娘なんです」
鶫「うん？」
鶫、片手をついてしゃがむ
隼歌「私はあの、Ｐｅｎｅｔｒａｔｅ の娘なんです」

鶫、目を丸くする
鶫「そうか、君が。どうりで…」
隼歌「だから、私は！やりたいことをやる権利なんてないし、ましてや、」
楽譜に目を落とす隼歌
隼歌「作曲なんて！歌なんて！」
隼歌を見つめる鶫
隼歌「そんなこと、出来ないんです」
鶫、隼歌の肩に手を置く
鶫「誰が、そんなこと言ったんだ」
隼歌「……母です」
鶫「……そうか」
鶫、顔を歪める
鶫M「この呪いには僕自身にも見覚えがある」
×　×　×
（フラッシュ）
中学生の鶫、父に怒られている
中学生の鶫、父に殴られている
あざだらけの鶫の顔

×　×　×

鶫M「長い間積み上げられてきた、どす黒い呪いだ」

隼歌、涙をハンカチで拭う

鶫、ハンカチを見る

鶫「あ、そのハンカチ」

隼歌、ハンカチを見る

隼歌「そういえば、このハンカチ、何かあるんですか？」

鶫「お母さんに、聞かれたのかい？」

隼歌「どうしてそれを」

鶫、うつむく

鶫「実は……」

鶫の口が動く

隼歌、そのハンカチを見つめる

隼歌「そう……だったんですか」

鶫「そうだよ」

鶫「だから、そのハンカチ、大事にしなよ」

隼歌、ハンカチを抱きしめる

隼歌「はい」

隼歌、立ち上がる
隼歌「……そろそろ学校行きます」
鶇、立ち上がる
鶇「大丈夫かい？」
隼歌、赤い目で微笑む
隼歌「行かなきゃ母に怒られちゃうので」
鶇、眉をひそめながら微笑む
鶇「……そうか」
鶇、楽譜をペラペラと見せる
鶇「この楽譜、預かっていてもいいかい？」
隼歌、ゆっくり頷く
鶇「ありがとう」
鶇、スケジュール帳をチェックする
鶇、小さくつぶやく
鶇「やっぱり明日か。ちょうどいい」
鶇、隼歌を見る
鶇「あと、明日は絶対に学校に来ること。いいね？」
隼歌、キョトンとする
鶇「分かった？」

隼歌、コクリと頷く
鶇「引き留めてごめんね。学校、行っておいで」
隼歌「いえ、ありがとうございました」
隼歌、会釈して歩き出す
鶇、それを見送る
鶇「よし。やるか」
鶇、大学に戻っていく

○シーン21　隼歌の中学校　翌日　5限前

ざわついている教室
隼歌、一人で座っている
クラスメイトが数人、ストーブの周りに集まってだべっている
クラスメイト1「やっぱ隼歌ちゃんってさ」
クラスメイト2「いやーどうかわかんないよ？」
クラスメイト3「でもいっつも一人じゃん」
隼歌、うつむく

クラスメイト1「やっぱあの噂まじなんじゃない？」
隼歌M「ここは、息がしづらい」
クラスメイト3「あー」
隼歌M「深海に閉じ込められているみたいだ」
クラスメイト3「犯罪者の娘ってや」
鶫、教室のドアを勢い良く開ける
生徒たち、一斉に鶫を見る
隼歌、思わず立ち上がる
隼歌「鶫さ」
鶫、しーっというジェスチャー
隼歌、大人しく座る
チャイムが鳴る
生徒たち、各々自分の席に着く
鶫、教卓の前に立つ
チャイムが鳴り終わる
鶫、教卓に両手をつく
鶫「えー本日特別講師をいたします大空鶫です。普段はハヤブサ大学で歴史を研究し

ています」
隼歌、ポカンと口を開ける
鵜「君たちは、Ｐｅｎｅｔｒａｔｅという歌手を覚えているかな？」
隼歌「え…」
ざわつく教室
鵜「君たちがざわつくのも無理はない。彼は名前を出すのもタブーな犯罪人だからだ」
鵜「そもそも何故歌手や歌がタブーなのか知っているかい？」
鵜、隼歌を指さす
鵜「あーそこの」
隼歌、自分を指さす
鵜「そう。君だ君。分かるか？」
隼歌「……不謹慎だからですか？」
鵜「まぁ、概ね正解かな」
鵜、黒板にタイムグラフを書く
鵜「何十年か前、この地球は第六次氷河期に突入し、人口が半分も減った」

鶫、教室を見渡す

鶫「たくさん人が死んだんだ。道端に凍死した死体がゴロゴロ転がってた」

×　×　×

（フラッシュ）

道に転がるたくさんの凍死体

中学生の鶫、それを足でどかして歩く

中学生の鶫、白いため息をつく

×　×　×

鶫「皆生きるのに精一杯だった」

鶫「だから、何かを楽しむのは不謹慎だという考えが広まったんだ」

鶫「特に歌は呼吸が激しく、多くの人の命を奪う象徴となったため禁忌とまでされた」

鶫「だけど、その時に現れたのが彼だったんだ」

○シーン22　ビルの屋上　十八年前　夜

一人佇む蒼空（２２）
蒼空、顔に狐のお面をつけている
スマホをセットして座る
蒼空「こんにちは。Ｐｅｎｅｔｒａｔｅです。よろしくお願いします」
蒼空、弾き語りを始める

○シーン２３　隼歌の中学校　教室　現在

鶫「あの人の歌は多くの人を魅了した」
鶫「政府もどうにかしようと嗅ぎまわったらしいんだけどなぁ。どうにも見つけられなかったらしい」
隼歌、鶫をじっと見つめる
鶫「だが、事態は一変した」
鶫「いまから十五年前、何があったか知っているかい？」
隼歌「突発的深層氷河期」
鶫「そうだ。よく勉強しているね」
隼歌「…はい」

鵜「そんな時だったんだ。すっかり有名人になった彼が公然の前に姿を現したのは」

○シーン　２４　野外劇場「金糸雀」十四年前
夜

たくさん転がっている凍死体
野外劇場「金糸雀」（以下野外劇場）の舞台の中央にはビル三階建てくらいの高さの小舞台がある
小舞台へはガラスの階段が設置されている
そこかしこで暴動が起きている
蒼空（２６）、お面をつけて舞台の中央へ進む
警察、暴動を止めようとするが止まらない
どんどん広がっていく暴動
鵜（１４）迷惑そうに避けて通る

鵜M「もう日本も終わりだな…」

蒼空、ガラスの階段をのぼる
鶫、それを興味深そうに見る
聴衆、何人か鶫を見ている
蒼空、登り切ってお面を外す
蒼空「こんにちは。Ｐｅｎｅｔｒａｔｅです」
モブ１「お前が！！」
モブ２「ふざけんな！この犯罪者が！」
聴衆、物をステージに向かって投げつける
聴衆、何人かバタバタと倒れる
鶫、蒼空の顔を見て目を見開く
蒼空、それらを見下ろして一息つく
蒼空、息を吸って歌い始める
聴衆、暴動をとめる
鶫、目を丸くして驚く
蒼空、肺が凍り苦しく顔をしかめる
蒼空、それでも歌い続ける
黙ってみている人達
鶫、涙を流す
蒼空、歌い終える

蒼空、ハァハァと肩で息をする
鶫、小さく拍手をする
そこから拍手が広がっていく
何人か泣いている人達がいる
蒼空、大喝采を受けて満足そうに笑う
蒼空「ありがとうございざ」
蒼空、倒れる
ざわつく人たち
警察、駆けつける

○シーン２５　隼歌の中学校　教室　現在

鶫「これが歴史の真相だ。彼は身体を張って暴動を止めた。この様子は配信されていて、各地での暴動はめっきり止んだんだ。彼の死因は肺が凍ったことによる呼吸困難だった」
隼歌、静かに涙を流す
鶫「世間には当たり前のように常識が存在していて僕たちは漠然とそれに従って生き

ている。でも、」

鶫、隼歌を見る

鶫「世の中に絶対なんてない」

鶫、教室を見渡す

鶫「今一度考え直すんだ。常識を常に疑ってくれ」

ざわつく教室

クラスメイト1と3、うつむく

鶫、にっこりと笑う

鶫「僕からは以上」

鶫、颯爽と立ち去る

隼歌、鶫からもらったハンカチを握りしめる

隼歌、立ち上がる

隼歌、教室を出ていく

○シーン26　隼歌の中学校　廊下

鶫、歩いている

隼歌、後ろから追いつく

隼歌「鶫さん！」
鶫、振り返る
隼歌、肩で息をしている
隼歌「あの……」
鶫、微笑む
鶫「ごめんね。こんな形でしか話せなくて」
隼歌、涙を流す
隼歌「本当ですか。Ｐｅｎｅｔｒａｔｅは、お父さんは」
鶫「うん。あれが真実だ。少なくとも僕は彼が犯罪者だなんて思わない。これっぽっちも」
隼歌、崩れ落ちる
隼歌「そうですか…よかった…」
鶫、隼歌の肩をさする
隼歌「鶫さん。私、大丈夫です。楽譜、返してください」
鶫「お安い御用だ」
鶫、楽譜を取り出し渡す
隼歌、楽譜を受け取って抱きしめる

隼歌「ありがとうございます」
隼歌、鶇に微笑む
隼歌「少し、心が軽くなりました」
鶇「よかった。本当に良かった……」
隼歌、立ち上がる
鶇「無理は、しちゃ駄目だよ」
隼歌、微笑む
隼歌「はい。ありがとうございます」

○シーン27　隼歌の家　玄関　放課後

家のドアを開ける隼歌
隼歌「ただいま」
若葉「……おかえり」
若葉、奥へ引っ込もうとする
隼歌「お母さん」
若葉、ゆっくりと振り返る
若葉「なあに？」
隼歌、鶇からもらったハンカチをギュッと握る

隼歌「ずっと、嘘ついててごめん。私、歌が大好きなの」
若葉「何故？あれ程までに私が如何に歌を憎んでいるか伝えてきたのに？」
隼歌「オルゴール」
若葉、ハッとして隼歌を見る
若葉「あれは私が捨てたはず」
隼歌「拾ったの。ゴミ捨て場から」

○シーン２８　ゴミ捨て場　十年前

隼歌（４）、ゴミ捨て場の前を歩く
隼歌、オルゴールを見る
隼歌「…きれい」
隼歌、オルゴールを持ち上げる
隼歌、オルゴールをまじまじと見る
隼歌、オルゴールを抱えて走る

○シーン２９　隼歌の家　リビング

隼歌Ｍ「母の歌嫌いは、子供の頃からなんと
なく察していた。でも」
隼歌、つまみを見つける
隼歌「なにこれ」
隼歌Ｍ「きっと素敵なものだと思ったから」
隼歌、辺りを見回す
隼歌、つまみをまわす
オルゴール、流れ出す
隼歌「わあ！すごい！」
隼歌、オルゴールを地面に置く
隼歌、地べたに座る
隼歌、ゆらゆらと聞いている

○シーン３０　隼歌の部屋　放課後　現在

若葉「そうだったの…」
隼歌、うつむく
隼歌「最近気づいたの。お母さん」
隼歌、オルゴールを取り出す
隼歌「この曲、Ｐｅｎｅｔｒａｔｅの、お父さんの

曲よね？」

若葉、押し黙る

隼歌「ある人に私の曲とお父さんの曲が似ているって言われて気づいたの」

隼歌、オルゴールを置く

隼歌「ねぇ、お母さん」

隼歌、若葉に近づく

隼歌「私は何度も」

×　×　×

（フラッシュ）

五歳の隼歌、揺れながらオルゴールを聞く

七歳の隼歌、笑顔でオルゴールを聞く

十歳の隼歌、涙目でオルゴールを聞く

十三歳の隼歌、オルゴールを抱きしめる

×　×　×

隼歌「あのオルゴールに救われてきたの」

若葉、顔を曇らせる

隼歌「歌ってそんなに悪いものなのかな」

隼歌、若葉の目をじっと見る
窓の外の吹雪が一層ひどくなる
若葉、隼歌の肩をつかむ
若葉「私はね、歌に全てを奪われたの」
若葉「もしかして、過去のこと、全部知ったのかしら？」
若葉、隼歌の肩をギュッと掴む
隼歌「（痛がって）いっ……」
若葉「歌が、あの人を殺したのよ」
若葉「歌が、夫が犯罪者という事実が、私から日常を奪ったのよ」
若葉「歌さえなければ！普通に暮らせたのよ！三人で！」
涙目の若葉
若葉「私は夫が特別じゃなくてよかった。三人で慎ましく暮らせれば幸せだったの」
隼歌M「お母さんも、お母さんなりの思いがあるんだ」
隼歌、拳をギュッと握る
隼歌M「でも」

隼歌「それ、歌のせいじゃなくない？」
若葉「はぁ？」
隼歌「悪いのは、意味わかんない理論で歌がタブー視されてるのを何も疑わず、それを勝手にまつりあげてる人達でしょう？」
若葉「あなたなんてことを！世間を敵にまわすの？」
隼歌「それに、お父さんは好きで歌を歌ってたんでしょ？」
隼歌「お父さんが大好きだったものを、殺されたとか、奪ったとか、悪く言わないでよ！」
若葉「黙りなさい！何も知らないくせに！」
若葉、隼歌の襟首を掴む
隼歌、若葉から目を逸らさない
隼歌「私はお母さんがどれだけ脅そうが、態度で威嚇してこようが、すがってこようが、引かないよ」
若葉、隼歌から手を離す
隼歌「お父さんの名誉と、私の誇りに懸け

て」
少し沈黙
若葉「そう。あなたはもう駄目ね」
若葉、隼歌を押し倒す
隼歌「きゃあっ！」
若葉、近くにあった隼歌の鞄を掴む
隼歌「お母さん！やめて！」
隼歌、鞄を掴み抵抗する
若葉「こんな考えのあなたを外に出せないわ」
若葉、隼歌から鞄を取り上げ中から楽譜を取り出す
隼歌「この！」
隼歌、若葉にビンタ
若葉、目を丸くして頬を抑える
隼歌、肩で息をする
隼歌「大事なものなの！返して！」
隼歌、若葉から楽譜を取り上げようとする
若葉、隼歌を思い切り突き飛ばす

隼歌、壁に思い切り頭を打ち付ける
隼歌、軽い脳震盪を起こし崩れ落ちる
隼歌「うぁ…」
若葉、楽譜をビリビリに破く
隼歌、フラフラと若葉の元へいく
隼歌「やめ…て…」
隼歌、若葉の腕を掴む
隼歌、若葉を睨みつける
若葉「本当に、あなた変わったわね」
隼歌「元からこうよ」
若葉、隼歌をはねのける
隼歌、倒れる
隼歌「いったぁ」
若葉、部屋のドアをあける
若葉「明日から、もう外には出さないから」
隼歌、若葉を見上げる
若葉「あなたがその考えを改めるまでね」
若葉、ドアを閉めて出ていく
隼歌、苦し気に笑う
隼歌「じゃあ一生出られないや」

隼歌、そのまま意識を失う
鞆からもらったハンカチが床に落ちている

○シーン31　隼歌の部屋　翌日　早朝

隼歌、倒れたままの姿勢で目を覚ます
隼歌、ゆっくりと身体を起こす
鞆からもらったハンカチが落ちている
隼歌、それに気づき鞄に直す

隼歌「いてて…」
隼歌、頭を抑える
隼歌、ドアを見つめる
隼歌、ゆっくりとドアに近づく
隼歌、ドアノブに手をかける
隼歌、ドアに体重をゆっくりとかけて
押すが開かない

隼歌「だよね…」
隼歌、破かれた楽譜を見る
隼歌、ため息をつく
隼歌、落ちていたスマホを拾う

隼歌、スマホをじっとみつめる

隼歌「そうだ」

○シーン３２　ハヤブサ大学　研究室

ラジオが流れている

鵜、椅子に座っている

鵜Ｎ「あれから３日経った」

鵜、机に頬杖をつく

ラジオ「今話題の謎の人物 Ｐｒａｙｅｒ さんについて」

鵜「Ｐｒａｙｅｒ……？あぁ、祈り人、か」

鵜Ｎ「彼女からの音沙汰はない。説得に成功したのか、どうだったのかも分からない」

鵜、ため息をつく

ラジオ「一部の人達からは新世界の救世主などと呼ばれており」

鵜Ｎ「何か悪いことが起こってなければいいが…」

ラジオから隼歌の歌が流れる
鶫、思わず立ち上がる
鷹也、鶫の研究室のドアをノックする
鶫「はい」
鷹也、勢い良くドアを開ける
棚の本が全て落ちる
２人、沈黙して見つめる
鷹也「鶫さん見ましたか？」
鶫「目の前の惨状の話？」
鷹也「違います」
鶫「それもどうかと思うけど」
鷹也、本を足でどかしながら鶫の元へ
来る
鷹也、スマホを鶫に見せる
鷹也「これですよ！この動画！」
動画内にお面をつけた隼歌がいる
鶫、目を丸くして驚く
隼歌「こんにちは。Ｐｒａｙｅｒです」
隼歌、弾き語りを始める
鶫Ｎ「言うまでもなく声で分かった」

鶫「やっぱり、隼歌ちゃん……？！」
コメント「毎日ひまだなこいつも」
コメント「はよ学校行けガイジが」
コメント「いや、これは本物だろ」
コメント「いろいろ置いといて声綺麗すぎ」
コメント「引っ込め犯罪者」
コメント「いやこいつ自分が何してるかわかってんのか」
コメント「もう救世主だろこいつ」
コメント「この狂った世界を変えてくれ」
コメント「信者エグくて草」
コメント「いや実力は本物だろ」
鶫、同時接続者数を見る
鶫「同時接続者数一万人？！」
鶫、鷹也を見る
鶫「めちゃくちゃ有名じゃないか」
鷹也「一番の問題はそこじゃないです」
鶫「え？」
鷹也「ずっとなんです」
隼歌、歌いだす

鷹也「ここ三日間、ずっと配信してます。この子。平日なのに」

鶫、青ざめる

×　×　×

（フラッシュ）

鶫「誰が、そんなこと言ったんだ」

隼歌「……母です」

隼歌「行かなきゃ母に怒られちゃうので」

×　×　×

鷹也「あの子不登校って感じでもなくないですか？」

鶫、歯を食いしばる

鶫「そうだな……」

鷹也「……あの子の父親、もしかしてPenetrateですか？」

散乱している棚の本

鶫「気づいていたのか」

鷹也「あなたがここまで他人に干渉するなんて珍しいので」

鶫「そうなんだ。通報してどうにかなったとして、あの子が世間の奇異の目に晒される可能性が高い」

鶫、うつむく

鶫「その判断をするのは俺じゃない。あの子がするべきなんだ」

鷹也「じゃあどうするんですか？」

鶫、少し考え込み鷹也の顔を見る

鷹也「ノープランですか」

鶫「ノープランだねぇ」

鷹也、動画をちらりと見る

鷹也「もう、あなたが直接どうにかするしかないんじゃないですか」

鶫、黙ってコメント欄を見る

コメント「まじで知らんぞ」

コメント「世界を変えろ」

コメント「黒歴史確定」

コメント「救世主さまになんてこと」

鶫、動画にコメントを打ち込む

鶫「そうだね。君の言う通りかもしれない」

鵜、立ち上がる

鷹也「行動できるものにしか言う権利はないんでしょう？」

×　×　×

（フラッシュ）

鷹也（１６）、道の端でうずくまっている

鵜（２０）、鷹也に手を差し伸べる

鷹也、鵜の手をとる

×　×　×

鵜「懐かしいこと言うね」

鵜、バッグとコートをとる

鷹也、微笑む

鷹也「案外、記憶力いいので」

鵜「じゃあ、行ってくるよ」

鷹也「はい」

鵜、研究室の扉を閉める

鵜コメント「応援してる」

○シーン３３　隼歌の部屋

隼歌、若葉の足音を聞く
隼歌、配信を切る
隼歌、付けていたお面を外し片付ける
若葉、部屋をノックする
隼歌「なぁに？」
若葉、ドアを開ける
若葉「あなた、まだダメなの？」
隼歌、微笑む
隼歌「うん。私は折れないよ」
若葉、目を伏せる
若葉「そう。残念ね」
隼歌、若葉に視線を合わせない
隼歌「そうだね」
若葉「あんたね！いいかげんに」
玄関のチャイムが鳴る
隼歌と若葉、きょとんとして顔を見合わせる
若葉、ため息をつく
若葉「出てくるわ」

若葉、部屋を出ていく
隼歌、窓から外を確認する
鶫、隼歌の家のドア前に立っている
隼歌「鶫さん……！？」

○シーン34　隼歌の家の前

雪が降っている
若葉、ドアを開ける
若葉「はぁい」
鶫、傘をさしている
鶫、軽く会釈する
鶫「どうも。児童相談所の者ですが」
若葉、青ざめる
若葉「な、なんですか？娘は風邪で学校を休んでいるのですが」
鶫「嘘ですね？」
若葉、固まる
若葉「な、なぜそう思うのですか？」
隼歌、階段を駆け下りてくる

隼歌「鶇さん！」
鶇「隼歌ちゃん」
隼歌、涙目
若葉、隼歌にゆっくり近づく
若葉「あ、あら、隼歌、どうしたの？」
若葉、隼歌の頭に触れようとする
隼歌、身体が震えている
若葉「部屋で休んでなさいって」
隼歌、若葉の手を払いのける
隼歌「……助けて」
若葉「あなた何を」
若葉、隼歌の腕を掴もうとする
鶇、若葉の腕を掴む
鶇、肩で息をしている
鶇「よく言った」
鶇「隼歌ちゃんのお母さん。言動で相手を支配しようとするのは、よくないですよ」
若葉「うるさいわね……離しなさいよ」
若葉、鶇の手を振りほどく
鶇、若葉と隼歌の間に割って入る

鶫「大丈夫だったかい」
隼歌、くしゃみをする
若葉「……中に入りましょうか」
若葉、隼歌に近づく
鶫「さっきの光景を見て」
鶫、若葉の方に向き直る
鶫「あなたたちを二人きりにさせられません」
若葉「何を勝手に」
隼歌「鶫さんと一緒じゃないと入らない」
若葉、ため息をつく
若葉「分かりました。じゃああなたも一緒に」
三人、家に入る

○シーン35　隼歌の部屋

若葉、ガミガミと怒鳴っている
隼歌、俯いている
鶫、周りを少し見回す

鶫M「おかしい。彼女の話ではもっと」
鶫「楽譜、ありましたよね。この子の部屋」
若葉「ん？あぁ、全て破いたわ」
鶫、若葉を見る
鶫「この子がどんな思いで書いていたと！」
若葉「だって必要ないじゃない。この子の人生に」
鶫「必要かそうじゃないかを決めるのは隼歌ちゃんでしょう」
鶫「あなたじゃない」
隼歌「鶫さん、ありがとうございます」
鶫、隼歌を見る
隼歌「大丈夫です。私」
隼歌、棚の裏から繋ぎあわせた楽譜を取り出す
隼歌「楽譜は」
隼歌、にやりと笑う
隼歌「ここです」
隼歌、楽譜を広げる
鶫、思わず笑う

鶫「強かだな。さすが」
隼歌、微笑む
隼歌「それほどでも」
鶫、若葉の方へ向き直る
若葉、罵詈雑言を浴びせている
鶫「隼歌ちゃん。確かにお母さんがいうことも一理ある。」
若葉、鶫に近づいていく
鶫「君は一生奇異の目に晒されるかもしれない。」
若葉、鶫の前で立ち止まる
鶫「理不尽だってたくさん経験するのかもしれない」
若葉、鶫をビンタしようとする
鶫「でも」
鶫、若葉の手を受け止める
鶫、隼歌を見る
鶫「君はやりたいんだよね」
隼歌、微笑む
隼歌「はい」

鶫「そうか」
若葉、手を振りほどこうともがく
鶫「いっておいで」
隼歌、鶫の後ろから飛び出す
隼歌「はい！」
隼歌、部屋を走って出ていく
若葉「あなた、なんてことしてくれるのよ！」
若葉、目に涙をためている
鶫「すみません」
鶫、若葉の手を離す
鶫「でも、あなたの夫は、歌手Ｐｅｎｅｔｒａｔｅは」
若葉「犯罪者じゃない？」
若葉、嘲笑する
若葉「時々いるのよね。実際にあの現場を見て心を奪われた信者が」
鶫、微笑みながら首を振る
鶫「それだけじゃないです」
若葉「え？」

鶫の口がアップで動く

鶫「ハンカチ」

若葉、目を見開く

若葉「あなたがなぜそれを」

鶫、隼歌の鞄からハンカチを取り出す

鶫「はじめ、驚いたんです」

○シーン３６　十五年前　図書館

あざだらけでベンチに座る鶫（１３）

鶫、目に涙をためている

○シーン３７　隼歌の部屋　現在

鶫、ハンカチを広げる

鶫「あまりにも、隼歌ちゃんのかく曲が」

○シーン３８　十五年前　図書館前

蒼空（２５）、鶫に近づく

蒼空「大丈夫かい？」

鶫、蒼空を見る

○シーン３９　隼歌の部屋

鶫、目に涙をためている

鶫「あの時の曲にそっくりだったから」

○シーン４０　十五年前　図書館前

蒼空、鶫にハンカチを渡す

そのハンカチには「Ｐｅｎｅｔｒａｔｅ」と刺繍

蒼空「これで涙拭きな？」

鶫、ハンカチを受け取り涙を拭き取る

○シーン４１　隼歌の部屋　現在

ハンカチには「Ｐｅｎｅｔｒａｔｅ」と刺繍

○シーン４２　十五年前　図書館前

鶫、ベンチの上で体育座りをする

鶫「僕はやりたいことをやっちゃいけないんです」

蒼空「どうして？」

鶫、膝に顔をうずめる

鶫「悪い子だから」

○シーン４３　隼歌の部屋　現在

鶫「俺は救われたんです」

○シーン４４　十五年前　図書館前

蒼空「…悪い子であっても、いい子であっても」

鶫、顔をあげる

蒼空「君がやりたいことをやる権利は今も、昔も、これからも、ずっと保証されてる

んだよ」

鶫、蒼空を見る

○シーン４５　隼歌の部屋　現在

鶫、微笑む

鶫「音楽が大好きなお人よしに」

鶫、涙が溢れ出す

○シーン４６　十五年前　図書館前

鶫、涙が溢れ出す

蒼空、鶫の頭を撫でる

○シーン４７　隼歌の部屋　現在

鶫「その時、蒼空さん言ってました」

鶫、ハンカチの刺繍を指さす

○シーン４８　隼歌の家　十五年前

若葉、オルゴールの前に座っている
蒼空、後ろから現れる
蒼空、ポケットからハンカチを取り出す
蒼空「これ、ありがとう。大切に使うよ」
若葉、刺繍を指さす
若葉「刺繍、頑張ったのよ？」
蒼空「Ｐｅｎｅｔｒａｔｅ…貫け？」
若葉、微笑む
若葉「そう。最後まで」

○シーン４９　隼歌の部屋　現在

鶫「自分の意志を貫けるように」
若葉、涙が溢れ出す
鶫「思い出してください！あの人が作る優しい音楽を！」
若葉、目に涙をためている
鶫「それでも、あの人は犯罪者ですか？」

○シーン５０　隼歌の家　十五年前

若葉、オルゴールを聞く

オルゴールがとまる

若葉、オルゴールのつまみを回す

もう一度流れ出すオルゴール

蒼空、後ろから現れる

蒼空「気に入ってくれた？」

若葉「ええ、とても」

○シーン５１　隼歌の部屋

若葉、微笑む

若葉Ｍ「そうだった」

若葉、オルゴールの前に移動する

鵜、それを目で追う

若葉Ｍ「彼の音楽は」

若葉、オルゴールのつまみを回す

若葉Ｍ「優しくて、不器用で、あたたかく

て」

オルゴールが流れ出す

若葉M「私だって、大好きだった」

若葉、オルゴールを置く

若葉「彼は、少なくとも私にとって、ただの夫で、歌手で、憧れだったのかもしれないわね」

鶫、微笑む

鶫「彼女の挑戦を、見届けていきませんか」

若葉、鶫を見る

鶫「きっといいもの見れますよ」

○シーン52　道

隼歌、走っている

隼歌、身に着けていたマフラーを鼻まであげる

隼歌M「もう、私の行く先は決まっていた」

隼歌、息を切らしている

隼歌、マフラーから白い息が漏れ出て

いる

隼歌M「怖い、でも」

隼歌、顔をあげる

隼歌M「やっと、という思いの方が」

隼歌の走る後ろ姿

隼歌M「ちょっと強い」

雲の隙間から少し太陽がさす

○シーン53　野外劇場「金糸雀」

午後三時

暴動が起きている

隼歌。お面をつける

警察が拡声器を持って対応している

隼歌、走ってくる

隼歌、警察の拡声器を奪い取る

隼歌「ごめんなさい！」

警察「ちょっと君！」

野外劇場「金糸雀」（以下野外劇場）

の舞台の中央にはビル三階建てくらい

の高さの小舞台がある
小舞台へはガラスの階段が設置されている
隼歌、ガラスの階段をのぼり小舞台にあがる
何人かは隼歌を見ている
隼歌、聴衆を見る
聴衆、暴動が起きている
冷たい風が吹いている
隼歌、スマホの配信を始める
隼歌、拡声器を構える
隼歌「こんにちは」
人々、一斉に隼歌を見る
隼歌「私は、Ｐｒａｙｅｒです」
ざわつく人々
人々、次々にスマホを見る
モブ１「配信、全くおんなじ場所でやってるぞ」
モブ２「まだ、こんな子供だったのか」
モブ３「あの声、本当に本物なのか」

モブ４「あのガキは何をしてるんだ！」
聴衆、何人かスマホでコメントを打つ
隼歌、お面を投げ捨てる
お面、小舞台の下にぱさりと落ちる
隼歌「ここからは、Ｐｒａｙｅｒ ではなく、一人の人間としてお話をさせて下さい」
隼歌、拡声器を持つ手が震える
隼歌「私は、Ｐｅｎｅｔｒａｔｅの娘です」
コメント「は？あの！？」
コメント「嘘松乙」
コメント「は？気をひきたいだけの嘘では？」
隼歌「そこは信じてもらえなくてもいい」
隼歌、下をむく
隼歌「私が、私が伝えたいのは」
隼歌Ｍ「怖い。自分の想いをこんなに多くの人に伝えることが」
隼歌、拳をギュッと握る
隼歌Ｍ「こんなに勇気のいることだなんて」
隼歌、ふと周りを見渡す

鵜がこちらへ走っているのに気付く
隼歌、深呼吸をする
隼歌「私は、お父さんは犯罪者なんかじゃないと思う」
声が震える隼歌
隼歌「歌ってそんなに悪いものですか？あなた達だって、歌に救われたことがあったでしょう？！」
暴動が起きる
コメント「まじか―」
コメント「いや Penetrate はやばかっただろ」
モブ５「犯罪者の娘って¤ト～？」
モブ６「年端もいかない子供が知ったことをいうな！」
モブ７「犯罪者は黙っとけ！」
人々、次々に隼歌に向かって石やごみを投げる
モブ８、モブ７を殴る
モブ８「やめろよ。この腐った世界を」

モブ８、モブ７の胸倉を掴む
モブ８「救ってくれるかもしんねぇんだぞ」
殴り合いの大喧嘩に発展する
警察「やめなさい！！」
隼歌、黙って見下ろしている

○シーン４６　舞台周り

鶫と若葉、到着する
二人、息を切らしている
ステージの隼歌と暴動を見る
鶫「一足遅かったか」
若葉「隼歌…！」
ステージにあがろうとするモブを見つける
鶫「やばい」
鶫、走り出す
若葉「あの！」
鶫、足を止めて振り返る
若葉、礼をする

若葉「お願いします。あの子の夢を叶える、
手助けをしてやってください」
鵜、礼をする
鵜「こちらこそ」
鵜、顔をあげて笑う
鵜「喜んで！」
鵜、向き直って走っていく

○シーン４７　外の舞台

隼歌、震えながら拡声器をおろす
隼歌、息があがって身体が震える
石やごみをぶつけられても動かない隼歌
モブ９「なんなんだあいつ」
モブ９、舞台にあがる

○シーン４８　舞台近くの道

鵜、走っている

鷹也、鶇に追いつく

鷹也「鶇さん」

鶇、驚いて鷹也を見る

鶇「鷹也！？仕事はどうしたんだ」

鷹也、鶇と並走している

鷹也「こんなもん仕事なんてしてられませんよ」

鶇「君の所々不真面目なとこ、嫌いじゃないよ」

二人、隼歌の方を見る

鷹也「あの子、無茶しますね」

隼歌、立ち尽くしている

鶇「本当にそうだ」

鶇「考えなしで、無鉄砲で」

鶇「でも」

鶇、笑う

鶇「そんな子供をひたすらに応援する、馬鹿な大人がいたっていいだろ？」

鷹也、笑う

鷹也「あなたらしいですね」

二人、野外劇場横に着く
鶇、鷹也が持っている拡声器を見る
鷹也「……使います？」
鶇「うん」
鶇、駆け出す
鶇、振り返る
鶇「あ、警棒ももらえる？」
鷹也「え、あ、はい」
警棒を渡す鷹也
鶇、微笑む
鶇「ありがとう」
鶇、もう一度駆け出す

○シーン４９　野外劇場　午後三時半

鶇、舞台中央へ走っていく
鶇、ガラスの階段前にたつ
鶇、階段をのぼろうとしたモブ１０の
首ねっこをつかみどかす
モブ、尻餅をつく

モブ１０「ってぇ…。なにすんだ！」
静かに見下ろす鵜
鷹也、観衆の方へ混ざる
モブ１１「救世主かもしれないんだ」
モブ１２「とりあえず辞めさせろ！」
コメント「頭わいてんじゃないのか」
コメント「何がしたいんだ」
鵜、人々の方を向いて上を指さす
鵜、息を吸う
鵜「彼女は！」
拡声器の音が割れる
人々、一斉に耳を塞ぐ
鳥、一斉に飛び立つ
人々、静まり返る
鵜、指をおろす
鵜「救世主なんかじゃない」
人々、黙って鵜を見る
鵜「彼女は、Ｐｒａｙｅｒで、Ｐｅｎｅｔｒａｔｅの娘で、でも、それ以前に」
鵜、拡声器を握りしめる

鶫「ただの、一人の女の子だ」

隼歌、涙目

若葉、涙目

鶫、昔を思い出す

鶫、大きく息を吸い込む

鶫「肩書とかなんだとか関係ない！自分の目で見て判断しろ！お前ら大人だろ！」

鶫、ガラスの階段を警棒で思いっ切り殴る

大きな音を立てて壊れる階段

ざわつく聴衆

鷹也、その様子を黙って見つめている

警察「お、おい！捕らえろ！」

鶫、抵抗せずその場で後ろ手に拘束される

鶫、ステージに対面し、膝まづかされる

鶫、冷気が肺に入り込んで涙目

鶫、口から白い息が漏れ出る

隼歌、しゃがんで身を乗り出す

不安そうな顔をする隼歌
隼歌「鶇さん！」
鶇「俺のことはいい。やりたいんだろ？」
鶇、笑う
鶇「何が何でも貫き通せ！」
隼歌、目に涙をためる
隼歌「…はい！」
隼歌、立ち上がる
鶇、隼歌に自分の子供時代を重ねる
鶇、呟く
鶇「ぶちかませ」
隼歌、大きく息を吸う
隼歌、歌い始める
聴衆、動きをとめる
目を丸くして驚く警察
隼歌M「世の中はやっぱり平等じゃなくて、
理不尽は不条理に私たちに牙をむく」
鷹也、微笑む
鶇、微笑みながら涙を流す
隼歌M「でも、そんなことがなんだ」

隼歌、歌い続ける

隼歌M「限りある制約の中で精一杯あがくって決めた」

黙ってみている人達

泣き崩れている若葉

隼歌、微笑んでいる

隼歌M「私の人生だから」

歌い終える隼歌

ハァハァと肩で息をする隼歌

小さく拍手をする鷹也

そこから拍手が広がっていく

鵜「さすが…やっぱあの人の娘だ」

何人か泣いている人達がいる

隼歌、一礼する

大喝采を受けて満足そうに笑う隼歌

隼歌「ありがとうございました！」

終